広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	DonneのTwicknam Gardenの韻律
Author(s)	藤野, 健太郎
Citation	ニダバ , 23 : 94 - 103
Issue Date	1994-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00047977
Right	
Relation	

論　文

Donne の *Twicknam Garden* の韻律

藤　野　健太郎

1　序

John Donne (1572- 1631) のTwicknam Garden はLucy, Countesse of Bedford に捧げられた彼のオマージュであるというのが通説であって、書かれた時期はおよそ1607年であることが分かっている。しかしながら彼女に捧げられたこの詩が、この詩の表題になっている庭園のたたずまいに触発されて歌われているかというと、そのことには疑問が投げかけられていて、この詩は彼女に捧げられた詩の中でも極めて謎めいているとともに難解なものの一つである。

この詩が作られたと言われる1607年から10年間Lucyはこの詩の題になっているTwicknam Parkを館にしていて、そこはwitsが集う場所になっていた。そして当時彼女は英国でも最大の芸術擁護者であったから、彼女の庇護を受けた者たちの中には、彼女の友人でもあったDonne を含む多くの詩人たちや、音楽家のJohn Dowlandなどがいた。

彼女の援助を受けた者たちが互いに影響し合う関係であったことは推測可能なことであるが、なかでもDowland がDonne の詩に曲をつけたものが楽譜に残されていることは、この二人がとりわけ強く影響し合う関係にあったことを語っているように思われる。

2　先行研究および仮説

Helen Gardner はこの詩が含まれるSongs and Sonnets の中の54編の詩は、それぞれで扱われる男女間の関係の種類によって、第１組は21編の「哲学的な叙情詩」、第２組は23編の「ペトラルカ風でも哲学的でもない詩」、および第３組は10編の「ペトラルカ風な詩」という三つの組に分けることができると言っている。

そして彼女はこれらの詩は韻律の特徴を見ると、大まかには一スタンザに対する行数、およびスタンザ内の行の長さにおける変化の総数という二つに分けることができると言っている。つまり第１組を特徴づけるのは、スタンザの行数は４行から14行までさまざまであるが10音節の行を基本にしていることである。第２組を特徴づけるのは、スタンザの行

数は 'Song' の形式に則ったものであって８音節の行の詩であること、'epigram' の形式に則ったものであって10音節の行の詩であること、および大多数は10音節の行と８音節の行が結びつけられた詩であることである。そして第３組を特徴づけるのは、第１、２組の特徴を兼ね備えていることである。

Twicknam Garden で扱われる男女間の関係は「華やかな春と、つれない恋人を持った恋する人の惨めさとの対照」というペトラルカ風のテーマをもったものであって、スタンザの特徴は、第１組に見られる10音節の行と８音節の行が結びつけられた９行（10、8、8、10、8、10、8、10、10）である。

このようなスタンザから成り立っているこの詩の韻律は基本的には弱強調である。しかしながら冒頭の行では「過去分詞＋with＋名詞、（and ）過去分詞＋with＋名詞、」という極めて整然とした構成が見られながら、その韻律は「強弱弱強、強弱強弱弱強、」になっていて、たった一行の中に三回も倒置がくり返されている。

Twicknam Garden

BLASTED with sighs, and surrounded with teares,
Hither I come to seeke the spring,
And at mine eyes, and at mine eares,
Receive such balmes, as else cure every thing;
But O, selfe traytor, I do bring 5
The spider love, which transubstantiates all,
And can convert Manna to gall,
And that this place may thoroughly be thought
True Paradise, I have the serpent brought.

'Twere wholsomer for mee, that winter did 10
Benight the glory of this place,
And that a grave frost did forbid
These trees to laugh, and mocke mee to my face;
But that I may not this disgrace
Indure, nor leave this garden, Love let mee 15
Some senslesse peece of this place bee;
Make me a mandrake; so I may grow here,
Or a stone fountaine weeping out my yeare.

Hither with christall vyals, lovers come,
And take my teares, which are loves wine, 20
And try your mistresse Teares at home,
For all are false, that tast not just like mine;
Alas, hearts do not in eyes shine,
Nor can you more judge womans thoughts by teares,
Then by her shadow, what she weares. 25
O perverse sexe, where none is true but shee,

Who's therefore true, because her truth kills mee..

Gardner はこの行の韻律の特異さに注目していて、そのコメンタリーは次の通りである。

> l. 1. The amount of inversion of stress in this line is so great as to set up a trisyllabic rhythm:
>
> / × × / × × / × × /
> Blasted with | sighs, and sur|rounded with | teares,
>
> instead of
>
> / × × / × × / × × /
> Blasted | with sighs, | and sur|rounded | with teares.
>
> Cf. the opening line of Donne's sonnet on his wife's death. There is a lack of metrical tact in thus opening a poem with a line that sets up the wrong expectation.

彼女はこの行の韻律の調べ方には二通りあると言っているのであるが、私は前の四音節と後の六音節がそれぞれbreath-groupをなすとともに意味のまとまりをももっていることを重視して、本論文では、

/ x x / / x / x x /
Blasted | with sighs, | and sur|rounded | with teares,

という従来の韻律の調べ方を踏襲して、その可能性を主にDonne とDowland との影響関係に視線を当てて追う予定である。

3 本論

リュート奏者であるとともに気鋭のDowland 研究家でもあるAnthony Rooley（船山信子訳）は、Donne とLucyとの深いつながりを示すTwicknam Garden の冒頭の行にはDowlandの「主要な関心—特に“涙”“溜息”“眼”—を強く喚起するいくつかのイメージがある」と、この行にDowland の歌詞の典型をなす言葉が使われていることに注目している。

RooleyのDowland 研究の論旨は、Dowland の音楽に見られるこのような歌詞の典型をなす言葉および特定の音型を彼の音楽上のエンブレム（emblem）とみなしていることにあって、本論文では、私はRooleyの論旨を支持する立場に立っている。

エンブレムはルネッサンス期に極めて重視された視覚芸術であって、一般的には「寓意画（allegory）」、「警句（epigram）」、および「モットー（motto）」から成り立っていた。そして寓意画が表す意味は詩の形式をとる警句によって説明される仕組みになっていて、モットーは必ずしもつけられたわけではない。このようにエンブレムを成り立たせる

「寓意画」と「警句」とは緊密に結びついていた。

Roolcyはこのような視覚芸術としてのエンブレムをDowland の音楽に見られる歌詞の典型をなす言葉および特定の音型に当てはめているであって、彼の論旨を要約すると、「警句」とは「ダウランドの主要な関心－特に“涙”“溜息”“眼”－を強く喚起する」イメージをもつ歌詞のことであり、「寓意画」とは四度音程である二音と、それら二音に対して装飾音的に発声される二音との四音で構成される楽譜に現れた音符のことであると言っている。そして彼はそのエンブレムを「Lachrymae （涙）のモチーフ」と名づけている。

さらに彼はDowland が自家薬籠中のものにしたマドリガーレ(madrigal)特有の定型にも注目していて、それは「Lachrymae のモチーフ」と同様に四度音程である二音と、その二音の間にあって、それらに対して弱く発声される四音との六音で構成される「六音の半音階主題」と言われるものである。つまりRoolcyはDowland の音楽を特徴づける特定の二つの音型を、ともに四度音程に修飾が施されたものであると言っているのである。

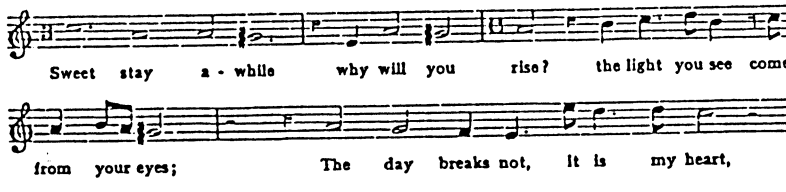
このようにDowland の音楽を特徴づけるものとして問題にされる四度音程は、ルネッサンス期の考え方を特徴づける「存在の大いなる連鎖」、すなわち宇宙の中の調和およびそれと人間との関わり、に基づいている。

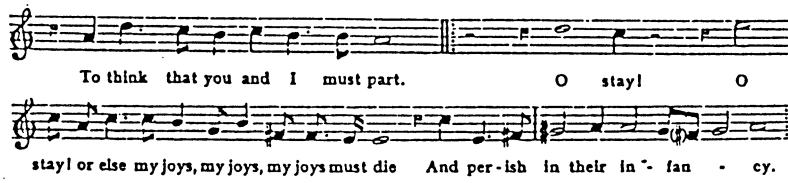
当時の、宇宙の中の調和として音楽をとらえようとする考え方によれば、音楽は八度音程（octave, または diapason)、五度音程（diapente）、および四度音程（diatessaron）から成り立っていて、天球は常に完全なディアパソンの音で鳴り響いていた。そしてディアペンテとディアテッサロンは、Donne が一時期著作を通して深く関わっていたといわれるNeo Platonistsの考えによれば、前者は「神を意識することによって信仰深い人間が得る深い知恵が受ける安定と力を象徴」するもの、後者は「人間の弱くて動揺する不定の、つまり俗世的な状態を表す」ものとして（Roolcy）、両者は対比の関係にあった。

ところでTwicknam Garden は、Donne と Dowlandの双方ともが庇護を受けていたLucyに捧げられたものであることや、冒頭にはDowland の音楽に見られる歌詞の典型が現れていることなどから、二人の親密な関係をもっとも想像させるにも拘わらずDowland はこの詩に曲をつけてはいない。

しかしDonne の詩集Dubia （Helen Gardner 編集）の中の ‘Stay, O sweet, and do not rise’ で始まるSongが、Dowland のリュート曲集A Pilgrim's Solace, Part 1、1612の二つのスタンザの内の第一スタンザの歌詞に現れている。（譜例１）

譜例１： Stay, O sweet, and do not rise (p. 108)





(Dowland, *A Pilgrim's Solace*, 1612)

譜例１は小節と歌詞のbreath-groupとが一致しているとともに、一つの音符に歌詞の一語が対応させられているというグレゴリア聖歌の特徴が認められる。そのため音符に歌詞の強弱をあてはめることができるから、歌詞との関係で冒頭の四音を見ると、それらはストレスがある二音［ド(Sweet)・ソ(while)］と、その間にあって、実際に歌われるときにはストレスがある二音に対して弱く発声される二音「シ（stay）・ラ(a-)」から構成されている。

それで譜例１をRooleyの論旨に沿って見ると、Dowland の歌詞の典型をなす言葉である‘eyes’があって、それは「警句」に当たる。そして楽譜に現れた冒頭の四音の音符は、上で見たように四度音程である二音［ド・ソ］と、それらに対して弱く発声される（つまり装飾音的に発声される）二音［シ・ラ］から構成されていて、それは「寓意画」に当たるであろう。つまり譜例１にはDowland の音楽を特徴づける「Lachrymae のモチーフ」が現れていて、この楽譜はエンブレムを成り立たせる二つの要素を備えていると言える。

以下ではこのようなRooleyの論旨に沿って、他の行に比べて特異な韻律であると注目されるTwicknam Garden の冒頭の行を検証する。

その韻律についての私の仮説は従来の韻律の調べ方を踏襲した、

/ x x / / x / x x /
Blasted| with sighs,|and sur|rounded| with tears,|

である。

この韻律の調べ方に見られる特徴は次の二点にある。すなわち第一点は前の四音節と後の六音節がそれぞれbreath-groupをなすとともに意味のまとまりを持っていることである。第二点は、ストレスが置かれる第三詩脚のand は実際にこの行が読まれる際には他の詩脚のストレスに比べて弱く発声されることを考慮に入れるならば、その第三詩脚を挟んで左右対称の韻律になっている。そしてそれぞれのbreath-groupにはストレスがある二つの音節と、それらに対して弱く発声される音節が、前のグループには二つそして後のグループには四つあるということである。

このような特徴をもつ二つのbreath-groupを見ると、前のグループにはDowland の歌詞の典型をなす言葉である‘sighs’があって、それは「警句」に当たる。またこのグループを構成する四音は、上で述べたように、ストレスがある二つの音節とそれらに対して弱

く発声される二つの音節から成り立っている。それでこれらの四音を視覚化して、音楽における四つの音符と考えて、ストレスがある二つの音節を四度音程とみなし、それらに対して弱く発声される二つの音節をそれらに対する修飾音とみなすならば、この四音節は「寓意画」に当たるであろう。そうであればこのグループはエンブレムの二要素を表しているということであって、それはDowland の音楽を特徴づける「Lachrymac のモチーフ」に相当する。

後のグループにもDowland の歌詞の典型をなす言葉である 'tcarcs' がある。そしてこのグループの六音節は、上で述べた理由によって、ストレスがある二つの音節と、それらに対して弱く発声される四つの音節によって構成されている。それで前のグループに対したのと同じように、これらの六音を視覚化して、音楽における六つの音符と考えて、ストレスがある二つの音節を四度音程とみなし、残りの四つの音節をそれらに対する修飾音みなすならば、この六音節はDowland の音楽を特徴づける「六音の半音階主題」に当たると言えるであろう。

このようにこの詩の冒頭の行の韻律を視覚化して、音楽における音符と考えるならば、この行を特徴づけるのは四度音程であると言えるであろう。

ところで四度音程は、Neo Platonist の考えでは「人間の弱くて動揺する不定の、つまり俗世的な状態を表す」ことについては既に触れた。(p. 4参照)

問題の冒頭の行では、'Blasted with sighs, and surrounded with tcarcs,' と詩人はペトラルカ風の大仰な表現で恋にやつれた様を歌っていて、この行では明らかに詩人が置かれている「人間の弱くて動揺する不定の、つまり俗世的な状態」が歌われている。

その上Gardner はこの行へのコメンタリーで「悪い予感を起こさせる一行でこのように詩を始めるには韻律に関する臨機応変の才能が必要だ」(p. 3の彼女のコメンタリー参照)と言っていて、彼女は冒頭の行の特異な韻律が、これから歌われること、つまり詩の内容と関係をもつことに注目している。それで、以下では詩の内容を瞥見することによって、内容との関わりから仮説を検証する。

第一スタンザ

このスタンザの前4行では、報いられない恋 (unrequitcd lovc)をしていて、やつれ果てた詩人は、心も晴れようかとこの庭園にわざわざ春を求めてやってきことを、ペトラルカ風の大仰な表現で歌う。

BLASTED with sighs, and surrounded with teares,
Hither I come to seeke the spring,
And at mine eyes, and at mine eares,
Receive such balmes, as else cure every thing;

しかし第５行目で、彼は一転して 'But O, selfe traytor' と、自分を裏切り者呼ばわりする。そして後４行で、彼は、自分をそのように呼んだ理由を、天よりの 'Manna' をも苦汁に変えてしまう「蜘蛛の愛」と、この庭園を本物の天国にするはずの「蛇」とを、この庭園に持ち込んだためだと言う。

But O, selfe traytor, I do bring 5
The spider love, which transubstantiates all,
And can convert Manna to gall,
And that this place may thoroughly be thought
True Paradise, I have the serpent brought.

このような詩人の行為を、川崎寿彦は『庭のイングランド－風景の記号学と英国近代史』(1983) の中で、「蛇が楽園を楽園たらしめる不可欠な属性なのだから、詩人はわざわざそれを庭に持ち込んだのだという。…これでは庭が呪いの空間となるのも無理はない。この構造的な自己憧着性に、詩人はペトラルカ以来の自己否定的または自虐的な愛のかたちを、盛りつけして見せてくれている」と分析している。

第二スタンザ

このスタンザの前４行で、詩人はこの庭園にわざわざ春を求めてやって来たというのに、かえってそれを呪わしく思って、春のさなかに冬を願うという混乱ぶりを見せる。

'Twere wholsomer for mee, that winter did 10
Benight the glory of this place,
And that a grave frost did forbid
These trees to laugh, and mocke mee to my face;

しかし第５－６行目で、彼は一転して、'But that I may not this disgrace/ Indure, nor leave this garden, と、アンビヴァレンスを暴露する。そして後４行では、詩人は愛の神に感覚をもたない 'mandrake' か 'stone fountaine' に変えてくれるようにと願っていて、彼の混乱は終息したかに見える。

But that I may not this disgrace
Indure, nor leave this garden, Love let mee 15
Some senslesse peece of this place bee;
Make me a mandrake; so I may grow here,
Or a stone fountaine weeping out my yeare.

第三スタンザ

このスタンザでは、第二スタンザの終わりをうけて詩人が'stone fountaine' になった場合が仮定して歌われていて、前4行では、彼の流す涙の味が女性の流す涙の真偽を判断する基準になるというコンシートが使われている。

Hither with christall vyals, lovers come,
And take my teares, which are loves wine, 20
And try your mistresse Teares at home,
For all are false, that tast not just like mine;

ここで使われるコンシートに関係する石について、E.M.W.ティリヤードの名著『エリザベス時代の世界像』（磯田光一訳）（1963 ）では、「存在の大いなる鎖」の中で「石は低級であるかも知れぬが、強さと永続性においては自分より上位のものにまさっている」という属性をもたされていた。それで、ここで使われるコンシートは女性の流す涙の「強さと永続性」を問うていることになるであろう。

第5行目では、詩人の言葉は一転して皮肉な調子を帯びる。そして後4行で彼は、女性のよこしまと、この詩が捧げられたLucyの貞節を三段論法を使って浮き彫りにして行く。

Alas, hearts do not in eyes shine,
Nor can you more judge womans thoughts by teares,
Then by her shadow, what she weares. 25
O perverse sexe, where none is true but shee,
Who's therefore true, because her truth kills mee.

その三段論法を松浦嘉一の注釈をもとにして見ると、第23行目は大前提であって「普通眼は the window of heart and mind と諺にも言われてゐるが、Donne はこゝでは、『あはれ悲し、心は眼に耀き出でじ』と例の cynicalな paradoxを言う」と解釈され、第24-25行目は小前提になっていて「只女の影を見て彼女の着物が何か分からない如く、女の心はその涙では判断し難し」と解釈される。そして第26-27 行目では「女性の 'perverseness' を諷刺し、而も終始彼女の純潔の厳として存することを暗示し、極めてcynical な筆法で彼女に homage を捧ぐ」と解釈される結論が導かれる。

このように、第一スタンザでは詩人の自己憧着が、第二スタンザでは詩人のアンビヴァレンスが、そして第三スタンザでは女性の操の不確かさがモチーフになっていて、Donne

は、周到にも、各スタンザの前４行と後５行の間にセミ・コロン（；）を置いて転調を計ることによってそれらのモチーフを強調していると考えられる。しかもそれらのモチーフに共通するのは四度音程が象徴する「人間の弱くて動揺する不定の、つまり俗世的な状態を表している」と言えるであろう。

４。結論

Anthony RoolcyはJohn Dowlandの音楽を特徴づけるのは四度音程であると言っていて、それを彼は「Lachrymae のモチーフ」および「六音の半音階主題」と名づけている。中でも「Lachrymae のモチーフ」については、それを視覚的にとらえてエンブレムとみなし、Dowland の音楽を特徴づける歌詞は「警句」であり、音符として現れる四度音程を伴った特定の音型は「寓意画」であると言っている。そして彼はDowland が四度音程に固執した理由を当時のNeo Platonist の思想に求めていて、それは「人間の弱くて動揺する不定の、つまり俗世的な状態を表す」と考えられていた。

John Donneの詩Twicknam Garden は、Donne とDowland との関係を色濃く反映していると考えられる詩であって、その冒頭の行の韻律は、他の行に比べてあまりにも倒置が多く、Helen Gardner は二つの韻律の調べ方があると言っているほどである。それでRoolcyが音楽を視覚的にとらえた論旨に沿って、冒頭の行の韻律を音楽における音符に置き換えて視覚的にとらえて、ストレスがある音節を四度音程とみなすならば、この行にはDowland の音楽を特徴づける「Lachrymae のモチーフ」および「六音の半音階主題」が現れていると言えるであろう。

しかも各スタンザは「人間の弱くて動揺する不定の、つまり俗世的な状態を表す」という共通のモチーフに基づいて歌われていて、そのモチーフは四度音程によって象徴されることである。

以上のことから、私はDonne の詩Twicknam Garden とDowland の音楽との間には影響関係があって、この詩の冒頭の行にはDowland の音楽を特徴づける「Lachrymae のモチーフ」および「六音の半音階主題」が現れていると考える。そのことによって本論文の仮説である、冒頭の行の韻律が、

/ x x / / x / x x /
Blasted| with sighs,| and sur|rounded| with tearcs,|

であることが証明されたと言えるであろう。

テキスト

1。Helen Gardner: The Elegies and The Songs and Sonnets (Oxford, 1978)
2。C.A.Patrides: The Complete English Poems of John Donne (J.M.Dent & Sons Ltd, 1985)
3。Kaitchi Matsuura: Select Poems of John Donne (研究社、1967)

資料

1。Antoney Rooley, 船山信子訳：「J.ダウランドの暗闇の歌に投げかける新しい光」、『音楽芸術』9月号（音楽の友社、1986）
2。R.ハマーシュタイン、C.V.パリスカ et al., 鈴木晶、村上陽一郎他訳：『天の音楽・地の音楽』（平凡社、1988）
3。E.M.W.ティリヤード、磯田光一訳：『エリザベス時代の世界像』（研究社、1963）
4。川崎寿彦：『庭のイングランド―風景の記号学と英国近代史』（名古屋大学出版会、1983）